

木簡から古代人を垣間見る

—藤原京衛門府関係木簡の展示—

展示期間 二〇〇九年一月二十四日（火）—二月七日（月）

二〇〇一年、藤原京跡左京七条一坊西南坪で発掘調査が行われた。調査地は、西は朱雀大路、南は七条大路に面し、藤原宮の正門朱雀門から南へ約三〇〇mにある一等地にあたる。木簡の内容から、藤原京の時代の後半には、衛門府（門の警備などを担当する役所）が置かれていたと判明した。この遺跡の池状遺構S X 五〇一から出土した木簡一万二六一五点のうち、二〇〇点を展示する。

a 王族とその周辺

出土した木簡の中には、王族など天皇の身近にいた、身分の高い人の名前が書かれたものがある。これらは、天皇から特別に許されて下賜された品物（別勅賜物という）を、藤原宮の中から門を通ってその人物の邸宅まで運ぶときに、門を通行する許可証として用いたものであった。

1 御名部内親王宛の送り状

〔飛鳥藤原京木簡〕二二〇五号。以下、木簡番号のみを記す

〔表〕御名部内親王宮

〔裏〕太寶

長さ（一四二）mm・幅（三五）mm・厚さ五mm ○八一型式

「御名部内親王」は天智天皇の娘で、高市皇子の妃となり、長屋王を生んだ人物。「宮」は王族の邸宅の意味。なお、「太寶」は元号の大宝で、古代には「太」を用いることが一般的。

2 県犬養三千代の名を記した木簡の転用品

（二四七号）

〔紐カ〕

〔表〕□養宿祢道代給□五

〔裏〕太寶元年十一月□□

長さ（二二六）mm・幅（二二）mm・厚さ三mm ○六五型式

「道代」は県犬養三千代で、藤原不比等の妻。この木簡と同じ大宝元年（七〇一）には、安宿媛（後の光明皇后）を産んだ。木簡を用途不明の木製品に転用している。

3 石川宮宛の荷物の送り状

（二四六号）

〔表〕○石川宮出椽一石 糸一斤
布一常

〔裏〕○大宝二年八月十三日 書吏進大初位下

長さ（二三〇）mm・幅三四mm・厚さ三mm ○一九型式

「石川宮」は、特定されていないものの、王族と推定される人物。椽（くぬぎの実。染料）一石（現在の約四斗。七一リットル）・糸一斤（約二二三g）・布一常（常布は長さ一丈三尺（約三・八五m）、推定幅二尺四寸（約七一cm）の麻布）を運ぶための送り状。書吏は、王族付きの役人。

